

令和 7 年度第 3 回 大分県文化振興県民会議 議事録（主な意見）

令和 8 年 2 月 1 0 日（火） 14：00～16：00
大分県立総合文化センター地下 1 階映像小ホール

■議題 1 大分県文化振興基本方針及び大分県文化創造戦略の最終案について

（大分県文化振興基本方針に関する意見）

○第 5-②「協力連携」の修正後の文章について、以下の意見があった。

- ・修正案では「誰が誰を支援するのか」が不明確で読み取りにくい。
- ・パブリックコメントの意図(県と市町村の連携・支援)が十分反映されていない。
- ・本文から「協力」という語が消え、タイトル「協力連携」との整合性にも課題がある。

■議題 2 令和 7 年度事業の実績及び令和 8 年度の主な事業について、次の意見があった。

○大分が瀬戸内国際芸術祭のように「定期的に訪れたいくなるアートの目的地」として成長することを期待。滞在しながら温泉や食、限定アート作品やグッズを楽しめる仕組みが整えば、大分の魅力がさらに高まる。また、クリエイティブ人材が関わることで、創造県おおいたとしての価値向上につながる。

○これまでの枠にとらわれないイベントが各地で生まれており、特に混浴温泉世界事業の取り組みからは地域を巻き込む大きなエネルギーが感じられる。別府以外の地域も巻き込みながら展開している点がすばらしく、今後も大分市以外のホールや市町村への巡回展示など、多地域で鑑賞機会を広げる工夫が望ましい。たとえば、市町村ごとに展示会を巡回し、人口比で入場者数を可視化するような仕組みも、地域活性化の視点から面白いのではないか。

○学芸員による対話型鑑賞を通じて、子どもたちの興味を大きく引き出せる事業は有効だと感じる。一方、令和 8 年度の幼児対象事業については、より自我が育つ小学校中～高学年も対象にしたほうが効果的ではないか。また、大分市内よりも鑑賞機会の少ない地方地域への招待に重点を置くことで、事業効果が高まるのではないか。

○別府のアートフェアでは、アーティストと直接交流できる点に大きな魅力があり、作品の背景を聞きながら購入できる楽しさがあった。ビーコンプラザの会場構成も工夫されており、迷路のような空間演出が来場者に新鮮な体験を提供していた。

○国東半島芸術文化祭のラバーダックを見に行ったら際は、人が非常に多く、地元の方がサンダ

ル姿で気軽に訪れていた様子が印象的で、地域に開かれた楽しいイベントだと感じた。今回のため池での展示も良かったが、もし可能であれば海のようなスケールの大きい場所の方が写真映えし、さらに魅力が増すのではないかと思った。それでも、周囲を回りながら楽しめたり屋台が出ていたり、とても満足度の高い体験だった。

○街中で行われていた「回遊劇場」に偶然参加し、パブリックスペースで気軽にアート体験ができる点に魅力を感じた。また、OPAM の竹会では制作の様子を見ることができ、多くの若い作家が活躍していることを実感した。作家が制作から販売まで継続できるよう、支援や補助があると望ましく、竹分野には今後も大きな可能性を感じている。

○日本広告写真家協会の学校向け事業では、専門家が授業で撮影指導を行い、子どもたちの作品が全国展で展示される機会がある点が魅力だと感じた。こうした取り組みを大分でも活用できれば、写真への興味を広げるよい機会になると思う。写真文化は将来“新しい伝統芸術”になり得るとも感じており、キャノンのお膝元である大分だからこそ、県全体で写真を楽しむ風土づくりが進むことを期待している。

○東京や京都では案内表示や設備が整い、外国人観光客を迎える体制が非常に充実していると感じた一方で、大分でも Beppu Art Walk のようなツアーが広がれば大きな魅力になると感じた。特に欧米の観光客は“ローカルだからこそ面白い”と感じる傾向が強く、大分でも受け入れ体制整備や各市町村でのコンテンツづくり、さらに大分の存在を知らせる情報発信が重要だと考えている。

○毎年続く県民芸術文化祭だからこそ、開幕式や閉幕式などと連動した「招待シート」を設ければ、より多くの人に鑑賞の機会を届けられるのではないか。